

搬を主とした作業中隊員となりました。馬とともに一日のノルマの二〇〇%も時には上げた記憶もあり、いわゆるハラショーラボーターとも呼ばれたこともありました。

しかし、この荒作業とノルマ遂行の陰には、幾多の犠牲が伴っておりまして。材木の切り出しや運搬には作業中の事故が続出し、幾人もの死傷者を出しました。

昭和二十二年八月ごろ、私を含めて四人で同胞（一人でした）の死体を約二キロメートル隔たった東方の新駅近くの墓地まで運び、穴を掘り、埋葬しました。夏期だったので、シベリアの凍土は解け、シャベルで楽に作業ができました。頭部を北向きにし、土をかけ、赤松の幼木を植えておきました。このときのこと今残念ながら、この同胞の氏名は記憶に浮かんできませんでした。

私はこの収容所で、私の町出身の佐藤六郎氏と再会したことは幸いでした。彼は昭和二十三年に帰国し、私は翌昭和二十四年九月十六日に舞鶴に上陸（明優丸）、復員しました。

あれから四十五年余り、老齢の身になった現在もシベ

リアの凍土に眠る痛恨きわまる同胞のことや、四年有余に及ぶシベリアでの強制労働。決して忘れることはできません。

タイセツト四二収容所

鳥取県 山本篤行

終戦はハルビン、孫家において武装解除。阿城から牡丹江集結のため貨車輸送、牡丹江弾薬庫収容。十月半ば日本帰国ということで有がい貨車の二段装置の中で毎日を送る。

「内地」のみ頭にあるのでバイカル湖が日本海に見えた。バイカル駅で日本帰還はうそであると観念した。また十月の末というのに果てしなきシベリアの山野は吹雪と変わり、輸送貨車に吹きつける雪と風は我々の前途を真っ暗闇にしてしまう。十一月三日（明治節）の朝引込線入って駅もない山の中の白雪がいたるところに「下車」の命令下る。またその場において携帯した大豆を

食べて夕飯にせよとのことで、雪の中から燃えるような枝を拾って燃やし、鉄板らしいものを拾ってきて大豆を焼いて食べる。また装具及び食糧はそりに積んで収容所に向かう。ロープをつけて二人は引く、後押し数人。大隊全員が黙々と雪の山道を登る。もちろんカンボーイ（警備ソ連兵）が点々と隊列を警戒する。幾時間かして収容所に着いた。

収容所は山の上にあつて、周囲すべて鉄条網をめぐらし、四隅に監視兵の立つ望楼。門の傍らに衛兵所あり、入門する。我々は隊列を組み五列の人数を点検、おの建物に入る。最近までドイツの捕虜がいたらしい。各部屋は上下二段に仕切られ、真ん中は板敷で窓際にベーチカがあり、窓は二重窓で外気を遮断するようにしてある。電灯なく白カバの皮を燃やして灯にするが、煙が出て室内は煙がもうもうとする。板の上に着用している外套のみである。上の段は暖かいが煙たい（夜は白カバの皮を燃やすため）下の段は寒い。扉を開ければ霧状の冷氣が部屋に入る（外は零下三十度前後）。牡丹江から二十何日貨車に揺られ初夜をあかした以上のようなところに

起居する運命となる。

翌日からベーチカでたく燃料（木の枝）収集の作業隊が各隊から編成された。雪深い山の中から枯れ枝を拾って担いで持って帰る。石炭も炭もまきもない。枯れ枝のみが我々の命をつなぐものであり、一刻として燃やさずにいられない貴重なものである。白カバや松の枯れ枝があるが鋸というものがない。また翌日からもみが各人に配られた。それは満州から我々と一緒に積み込んだものである。アワも同じく精白していない収穫そのままである。

その各人に渡されたもみは水筒に入れて木片を探してきてそれをつくのである。ある時間ついたものを手に乗せて口で吹いて米ともみ穀をえり分けるのであるが、半分くらいいしかもみ皮がとれていない。それを集めて炊事でたぐのであるが、原米（碎米）のもみと半々のものであるから飯らしいものにならない。それを飯ごうのふたに一杯ずつ配給して三百五十グラムの黒パンだけが三食である。もみがなくなつてからはアワとなる。相当期間この状態が続いた。もみ、アワがなくなつてからは澱粉

の粉（馬鈴薯）のスープにかわる。これが倉庫で変質していたものらしい（毒素発生）が仕方なく毎日食べる。そのうち医務室は患者で満員となり、いろいろな症状が出だした。下痢、嘔吐、発熱、めまい、痺れ、血便、腹痛、歩行困難、黄疸あらゆる病気発生。折からの寒気は零下数十度の日も連日ある。建物が病舎と区分される。

便所は屋外に深さ二メートル横五メートル縦二メートルの露天であり、排便はそのまま凍結して鍾乳洞の筍石のようになる。その上に新しいのが次々と落ちていくので、一日もすれば尻につかえるようになるので、それを倒さねば大便をすることができず、酷寒の屋外で下半身裸のまま便所するということは想像以上の苦痛であった。

また、栄養失調になると下痢してたびたび便所に行くようになり、ますます体力が衰えていく。身体は肉らしいところはなくなり腹部は膨張し、目は大きくなり、板の上に寝ると骨が当たって痛くて眠られない。眠気ばかり催し体力気力ともに喪失。生けるしかばねであるが、まもなくあまり苦しまずに冷たくなっていくのでそばに

いる者も知らぬ場合が多い。医務室に死体安置室ができ、死亡者は体温のあるうちに服を脱がせ裸のまま安置室の凍結した死体の上に積まれ、十分もしないあいだにカチカチの冷凍人間となり、幾人もの死体をまとめてそこに乗せ墓地に運び、あらかじめ前日に墓掘り作業隊の掘った穴に裸のまま埋葬。土砂で埋めて木片一本立てて日印としておく。毎日埋めていくのでその数は日に日にふえて雪に覆われていく。もちろん死人の身分などわかるはずはなく、初めは二人ずつだったのが死亡者激増のため十人、十五人、二十人と一緒に埋葬するようになった。また、凍土に穴を掘るのが並々ならぬ作業である。

健康な者のみが大体三十人から四十人単位で昼夜三交代作業するが、表土一メートルくらいまで凍結してスコップもツルハシ、（十字くわ）も全く役に立たないので、前夜の作業隊がたき火して土を解かし、翌日の作業隊がその下を掘っていくのであるが、幸い下部の地層は砂が主で掘りやすく山を開いて墓地としたのである。以上のようなまるで地獄の状態で、収容所全体が鬼気迫るというか靈気満つというか、収容所内が異様な空気に包まれ、

次々運ばれるそのを見ては明日も知れない自分の命のはかなさを片時も胸から離れることなく、生きる望みが全く失われ、死に対する思考力がゼロとなる。

以上のような状態の中で私もついに発熱した。現役で満州で鍛えた甲種合格でも体力の限界が来たのである。

四十度近くの熱で意識もうろうとして起きることができず、一か月余り体重十一貫（四一キロ）全く骨皮筋右エ門となる。この生死の岐路に立つとき神仏の加護か、日ごろの人徳が冥土行きを中止させたであろうか。分隊の兵隊がかわるがわる炊事からおかゆを持ってきて食べさせてくれた（これは内緒で夜、人目につかないように）今でもその恩は忘れない。逆境極限のときに公徳は現れると信じている。

しばらくして吉井良造大尉を大隊長とする三千人中、死亡八百人というソ連全体で抑留者の最高の死亡率となったのである。

翌春四月下旬、シベリアも春の気配が感じられ、長く山野を覆っていた氷雪も解け始め、雪解け水が凹地にあふれ地獄の惨状だった収容所も何となく「光」と「暖」

が感じられ、もしやウラジオストクの港の解氷によって我々の日本帰還があるでないか、それまで収容所に入れたでないか。日本には完全に船舶は一隻もなく沈められ、輸送手段がなくその段取りにこの冬シベリアに収容したかもしれない。すべてが善意に解釈して内地帰還のみが、念願にあるのである。

ところが、意に反して軍隊の大型トラックが何台も来て、おのおの大隊は中隊、小隊、班に分かれ乗車させられ、道なき道をトラックは走り、林の中の収容所でおろされ、おのおの幕舎に収容させられる。もちろん鉄条網と望楼だけは厳重にしてある。幕舎も二段装置の二階つきであるが、春に向かうため防寒の必要なく一時的なものであることはわかる。しばらくして翌日から本格的な労働が始まる。すなわち、まず森林伐採、道路建設、建築、水道工事、鉄道建設工事、製材工場、貯蔵工事（食物冬季間）あらゆる仕事に分かれる。

自後付近一带は日本人捕虜の手により未開の原野はシベリア沿線の都市同様開けてゆき、昭和二十四年六月まで当地に抑留されたのであるが、日本人の英知と犠牲に

よりシベリアが開発されたのである。

したたかな命

茨城県 松本 要祐

昭和十六年三月、ソ満第四国境守備工兵隊を召集解除になり、引き続き関東軍司令部の軍属として勤務中、昭和二十年八月七日応急動員令下、新京特別市防衛部隊として兵役に入る。

同八月二十日終戦、所属部隊は解散した。わずか二週間の極めて短い付き合いで、大正五年兵の戦友がたまたま新京市内に住居があり、同居する。無職となつて早速日常生活に支障が起きたので、大道店やその他のいろいろの手段で約一か月余り過ごしたところ、ソ連軍大五軍司令部が居所近くに進駐してきて、元軍人軍属は直ちに出頭せよ、違反者は銃殺に処す、との張り紙に驚き、指定の場所に集まったところ、一網打尽捕虜となり、南嶺の捕虜収容所にひとまず留置の上、数日後新京駅（現長春駅）

の貨物駅まで連行され、そこで元日本軍の新しい軍服に着替えさせられる。

一貨車五、六十人くらい（内部は急造の二階づくり）ずつ乗車させられ、入り口は分厚い板にて釘づけ、便所は一両ごとに床の中央に長方形の小さい穴を切り抜いただけで、わきにストープが一基、発車後はどこをどう走っていることや、入ソ経路などは皆目不明、何日目にソ連領シベリア鉄道を走行中らしいことだけはわかった。途中イルクーツクと呼ぶ駅をたつてから数時間後のこと、ストープのたき口からこぼれ落ちた火種が貨車の床に燃えついていたのを、用便に起きた同僚が見つけ、「大変だー」の大声に一同飛び起きた。何分真夜中の出来事にて警備隊は貨車の屋根にいて知らせようもなく、だれからともなく小便の出そうな者が全員そこに集まり、交互に消化に努めた。見た目にはまさに鎮火したようでも、走行中の貨車の小さい窓から入る風でまた燃え出す始末で、ついに全員手持ちの命から二番目に大切にしていた水筒を全部カラにしてやっと消化に成功し、焼死は免れた。貨車はそのような大事件も知らぬ顔に走